

詩人と時代

——ヘルダーリーンの讃歌をめぐって——

岩　橋　保

「別れにのぞんで僕の胸のしずかな、だが言いつくせぬ喜びを、おまえの胸に受入れておくれ——それは僕らの時代が近いということ、平和、唯それのみがもたらし得たものを、今成立しつつある媾和が僕らにもたらしてくれるだろうということなのだ。何故なら平和は多数の人々がのぞんでいるものを数多くもたらすが、少数の人々が豫感しているものをも、もたらしてくれるだろうから。」フランクフルトでのデイトーマ體驗の後、ホムブルク、シュトゥットガルトと休らう暇もなく、生活の糧をもとめて轉々としたヘルダーリーンは、今またニールティンゲンなる母の許からスイスのハウプトヴュールへ、家庭教師の職に就くために旅立つ直前の一八〇一年一月、弟カールに宛ててそう書いた。「今成立しつつある媾和」とこの手紙で言われているのは、それから間もない二月九日、ロートリンゲンの小邑リュースネヴィルに於て、ナポレオンとドイツ皇帝の間に締結された媾和條約を指すのだが、ヘルダーリーンをして「僕らの時代が近い」ことを豫感せしめ、よろこばしい平和への確信を書き綴らせる直接の動機になったかに見える、この現實の政治的なとりきめは、果してどんな内容を持つものだったのだろうか？

この所謂リュースネヴィルの媾和によつて、ドイツ帝國はまずライン左岸の領土を放棄する。その結果、以後ライン河がフランス共和國とドイツ帝國との境界をなすことになり、約四百萬、即ちドイツの當時の人口のほゞ七分の一を

擁する地域が失われ、更にドイツ帝國はその從來の機構を犠牲にすることを餘儀なくせられた。つまりライン左岸に領土を失つた世俗諸侯は、僧侶諸侯の領土を犠牲にしてドイツ帝國内で補償されることになった。かくしてドイツ諸侯相互間に醜い領土爭奪の掛引が惹起せられ、利己の一念に憑かれた諸侯は、餓えた蠅のように出血した祖國の傷にむらがり寄せるのである。全面的なドイツの敗北と屈辱以外の何ものでもなく、ひいては數年後の終焉にまで支うべくもなく進展する、舊ドイツ帝國の崩壞の發端とも言ふべきものが、この媾和の現實であつた。しかもヘルダーリンはこの媾和を容易ならぬ希望と喜びをもつて迎えるのである。弟への手紙は更に續く。「何らかの形式とか意見、主張が勝利を得るだらうというのではない。それらのことは平和の賜のうちで最も重要なものとは思えない。そうではなくて、あらゆる形をとつた利己主義が、愛と慈しみの神聖な支配のもとに屈服するだらうということ、共同精神があまねくゆきわたり、ドイツ的心情がこのような氣候のうちに、この新しい平和の祝福のもとに今こそ現れ出で、生長する自然にも似てしずかに、そのひそかにも廣大な諸力を展べひろげるであらうということ、僕が考え、感知し、信じるのはまさにこのことなのだ。そしてこれこそが僕の生涯の後半への見通しを、殊更に明るくさせてくれるのだ。」

確かにヘルダーリンは、來るべき平和の豫感と確信を、希望に溢れてこの手紙に書き綴つた。そして、この媾和につづいて訪れたのは以前に變らぬ、否以前にもました醜惡と汚辱の現實——「あらゆる形をとつた利己主義」が、「愛と慈しみ」の芽をすらも踏みにじり、「ドイツ的心情」はこのような瘴氣のもとに殆んど窒息しようとする。ヘルダーリンはこの媾和の具體的な現實を豫知せず、その後の慘めな經過を豫見しなかつたのだと考えるべきなのだろうか？ 媾和締結後の二月二十三日に、ハウプトヴュールから妹へ宛てた手紙にも、更に次のように書かれている。

「媾和が結ばれたという知らせで當地がいつぱいになっている今日、手紙を上げる。おまえは僕のことをよく知つていておくれたから、それを聞いて僕がどんな氣持でいるか今更言う必要はあるまい。今朝の挨拶にこの家の主人からそれを言われたときも、僕は殆んど何も言えなかつた。けれどもこの瞬間、程近いアルプスの上の明るく澄んだ空の

青さと汚れない太陽とが、喜びに何處へ向けていゝのかわからなかつただけに、ひとしお僕の眼にうつくしかつた。これからは世の中がきつとよくなると思う。僕は、近くにある、と言つてゐるけれど、久しく忘れられていた時代のことをよく考えてみたい。すべては稀にしかない時代を、美しい人間性の時代、恐怖のない確かな善意と、明るくて神聖な、崇高で素朴な志操の時代を招來するように思われる。」ヘルダーリンが、小説「ヒュペーリオン」第二巻、第二部の中に、ドイツ人に對するおよそ完膚ないまでに峻烈な彈劾の言葉を叩きつけたのは、これより僅か二年前であつた。その彼が今、日々に非としか考えられないドイツの現状を前にして、よろこばしい未來を希望にみちて書き綴ることは、一見奇異にも思えようが、それらは究極に於ては無論一つの楯の意味深い兩面に他ならなかつた。言い換えれば、「ヒュペーリオン」の彈劾の言葉は、あるべきドイツへの餘りにはげしい祈念の、言わばネガティブな表現であり、對する一方はそのアクティフな表現であるとも言えるだらう。しかもこの表出の仕方の相違は決して偶然的なものではなくて、ヘルダーリンの後期の詩、殊に讃歌を特徴づける積極的な一要素なのである。

重苦しい戰亂の休止を、ひとみな何はともあれ、ほつとした面持で迎える。ヘルダーリンとても例外ではないだらう。だがそれだけではこの場合何の解答にもなり得ない。あるべきドイツ、「ヒュペーリオン」の彈劾の言葉をそのまま裏返しにしたような、これらの手紙に見られる來るべき時代の未來像と、ドイツの現状との間に横たわる溝の極端な深さを、ヘルダーリンは當然知りすぎる程によく知つてゐた。それにしてもフランス革命による「神の國」實現の期待のむなしさを、ヒュペーリオンの幻滅を通じてくゞり抜けてきたヘルダーリンが、今またリュネヴィルの憐和の如き單なる政治的なとりきめのあとに、「愛と慈しみの支配」する時代の到來を豫感したというのは、一體どういう意味なのだらうか？ あるべきドイツへの餘りにはげしい祈念が、ふと性急さとなつてあらわれた、やはりこれはヘルダーリンの錯覺と言ふべきなのだらうか？ しかしこれには、それ相當の積極的な理由が當然なくてはならぬだらう。

ヘルダーリンは、ルューネヴィルの講和の示すドイツの現状の中に、疑いもなく舊ドイツ帝國の崩壞の相を看取していた。このことから直ちに、ヘルダーリンの胸中にフランス共和國の支配があつたと即斷するのは、勿論輕卒に過ぎるだろう。「何らかの形式とか意見、主張が勝利を得るだろうと言うのではない」と、ヘルダーリンは書いた。「愛と慈しみの支配」が、そのような言わば一を以つて一に代える、安易な樂觀主義とは何のかゝわりもないことは言を俟たない。それとはむしろ逆に、ヘルダーリンにとつてはあるべき本來の姿ではない現實のドイツ、そのドイツの崩壞の相を確實に看取したからこそ、それにつゞくあるべきドイツが、來るべき新たな現實が、同時に愈々強く豫感されたのだと言わねばならない。下降こそ上昇に通ずる唯一の道、それゆえにこそ歡呼の聲をあげて父なる大洋の腕へ流れ下る——これが半神の運命に他ならぬというのは、頌歌「縛められた流れ」(Der gefesselte Strom)と「ガニュメート」(Ganymed)に於て歌い上げられた悲痛な逆説であつた。消滅の中にのみ生成を見る、更に言えば消滅こそが生成の證しであるという確信は、單に「消滅の中なる生成につゞく」(Über das Werden im Vergehen)と題する哲學的斷片に於てだけでなく、ヘルダーリンの全文學を通ずる一貫した道なのである。嘗つて存在した、それゆえ來るべき神々の時代、それがヘルダーリンにとつての眞にあるべき現實であるとすれば、現在には神々の不在、あるべき現實の不在、あるべき現實の *Nicht-mehr-Sein* と *Noch-nicht-Sein* とを同時に包含するような時代であり、過去への逆行が當然不可能であつてみれば、未來に向つて流れ下る、これを描いて上方への道、あるべき現實に至る可能性は存在し得なかつた。ノヴァーリスその他の浪漫派の人々に見られる意味での中世が、ヘルダーリンの歴史意識には存在しないということも、これと無關係ではないだろう。

確かにヘルダーリンはルューネヴィルの講和の中に、舊ドイツ帝國の崩壞の相を見てとつたが、それに續くものは到底彼が豫感したような時代ではあり得なかつた。前述の弟への手紙にヘルダーリンは、平和は「少數の人々が豫感しているものをも、もたらしてくれるだろう」と書いていた。無論その少數の人々の中の一人であるに違いない

シラーは、ルューネヴィルの嫌和の後に書かれたと推定され、後に出版者ベルンハルト・ブーフアンによつて、「ドイツの偉大さ」(*Deutsche Größe*)と題された長詩の散文體の斷片の中で、大略次のような意味のことを書いた。

ドイツ人が、その涙にみちた戦いを不名譽に終えるこの瞬間に、二つの倨傲な民族がその頸上に足を置き、勝利者とその運命を定めるこの瞬間に——ドイツ人が自己の價値を自覺することが許されるだろうか？ 自己の名を讃え喜ぶことが許されるだろうか？ 頭を擧げ、自負を持つて諸民族の列に歩み出ることが許されるだろうか？

そうだ、許されるのだ！ ドイツ人の戦いは不幸に終つた。だが彼の價値を決定するものは失われてはいない。ドイツ帝國とドイツ國民とは別個のものなのだ。ドイツ人の尊嚴は決して諸侯らの頭上にあつたのではない。政治的な價値とは別に、ドイツ人は一つの固有な價値を築き上げた。そしてたとえ帝國が没落しようとも、ドイツの眞價は少しも損われることなく存続するだろう。

それは倫理的な偉大さであり、それは國民の政治的運命とは無關係な、國民の文化と特質の中に存在するのだ。

草稿は更に、「政治上の帝國が動搖している間に、精神の帝國は愈々堅固に、愈々完全に形成された」、「倫理と理性が、遂には勝利を獲得するに相違ない」、「最高のものがドイツ人には定められてあるのだ」という風に續けられてゆく。

こゝに引用したのは確かにシラーの完成された作品ではなくて、斷片的草稿にすぎないのだが、それだけにシラーの言わんとするところを、この場合、一層直接的に傳えてくれるとも考えられる。シラーはこゝで、ドイツ帝國とドイツ國民とは別個のものであり、ドイツ國民の文化と特質はその政治的運命に依存するものではないと、はつきり言いきつてゐる。封建諸國の分立という、言わば近代國家以前の政治形態しか持たなかつた、當時のドイツに於ける國家意識乃至は國民意識と、現代のそれとの間には、何らかの差異が存在することが當然豫想されねばなるまいが、その點は暫く措くとしても、こうしたシラーの考え方を唯單に現實離脱、美の理想國への逃避と一概に斷定し去ること

は許されない。自己の理念とは餘りにかけ離れた、當時のドイツの困難な現實の中で、その現實と對決するために、ドイツ理想主義の偉大な人々は夫々の仕方では苦闘した。そしてその苦闘の仕方によつて、とられた道は深い必然性をもつて様々にわかれた。そのことを考え合せば、政治の國と精神の國との、この大膽な分離のなかに、腐敗しきつた現實との安易な妥協や折衷をきつぱりと拒絶する、シラーの高潔な精神と誠實さへの勇氣を見るべきであり、政治的なものゝこの否定を通して、逆に現實のドイツの政治的狀態に對する、彼の深い憂慮と悲痛な臆惑とを感じとらねばならぬだろう。

ヘルダーリートをゲーテ、更にはシラーとさえも區別するものは、近づく事物の新しい秩序に對する生き生きとした感情である、とディルタイは指摘していた。ヘルダーリオンとシラーとの、時代に對する態度の微妙な差異を、こゝで全面的に結論しようと言うのではない。だが前述の「ドイツの偉大さ」に見られるようなシラーの考え方の底には、彼がゲーテ、フムボルト等の偉大な人々と共にその兩肩に荷つていた、ドイツ古典主義の見事な成果に對する深い信頼と自負が裏づけとして強く存在していたに違いない。事實それは政治的なものは愚か他の如何なるものをも凌駕するに足る、時代の最大の所産であつた。ひとしくドイツの現状の腐敗と崩壊を直視しつつも、それを客觀化し、それとは別個に、踏みとゞまつてたじろがぬだけの餘裕が、やはりシラーには與えられていたと言えるかも知れない。けれどもそのような、言わば惠まれた精神協同の場に參與することを許されてはいなかったヘルダーリオンにとつて、道が何らかの異つた方向を辿らねばならぬことは想像に難くないだろう。言い換えれば、ヘルダーリオンにとつては、程度の差こそあれドイツ古典主義の巨匠たちに共通して見られるような、ドイツの政治的・社會的現状とは或る意味で二元的乃至は平行的な精神の國成立の可能性を、自らに許容できぬ程に、事態は追いつめられ、絶望的であつたらう。すべては全社會の一變を経験するのでなければ、もはやどうにもならぬということ、そこにヘルダーリオンの末世觀が、特有の終末論的な考え方が由來するのであり、又逆に、そこにこそ深い牢獄にも似た周圍の重壁を破つてほ

とぼしる、來るべき未來への豫感の必然性が存在する。愛と慈しみの神聖な支配の時代と言ひ、美しい人■性の時代と言ふこのヘルダーリンの祈念は、リユーネヴィルの媾和の後は勿論、現代に至るまでなお永遠の課題として残されている。そして末世は愈々深く、時代のゆくては依然として暗い。リユーネヴィルの媾和の如き、歴史の流れの中の單なる一つの政治的な事件の中に、ヘルダーリンが究極の平和の到來を強く豫感したことに對して、結果論的に現代の我々が奇異の感を抱くことは自由だろう。或いはそのことから、トーマス・マンの有名な言葉を裏返して、ヘルダーリンがもしマルクスを知つていたら……などと、したり顔をすることも出来るかも知れない。だがそのことで、ヘルダーリンの文學の現代に對してもつ意味が、些かでも減殺されたのでないことは言うまでもない。

混亂と分裂の時代に生きて、それをそのまま混亂と分裂の様相で描き出すことが、時代に對する詩人の誠實さでも殉教でも勿論ない。喪失と絶望をエレギーッシュな響で嘆き歌うだけが、そのような時代の詩人に許される唯一可能な歌聲なのではない。また時代の害惡を餘すところなく抉摘して、なまの言葉で時代への彈効を書きつらねることのみが、時代に對する詩人の批判の態度でもない。本來あるべき姿でない末世の時代に生き、だからこそ却つて、眞にあるべき時代の姿を、唯ひたすらにヘルダーリンは歌ひ續ける。——崇高なものを讃えること、これが僕の天職なのだ。そのためにこそ神は僕の心に、言葉と感謝を與え給うた——と、ある斷片詩の中でヘルダーリンは歌つた。崇高なものを、來るべき新しい時代の到來を告知し讃える彼の歌聲は、所詮は彼を裏切つたにすぎぬリユーネヴィルの媾和の後に、そして程なく彼を襲うた狂氣の後にも止むことなく、一段とはげしさを増して續けられた。この極限にまで張りつめ、しかもなお高まることの他を知らなかつた弦は、狂氣が完全に彼から言葉を奪ひ去つた時にのみ、はじめて斷たれた。だが、地上に繋ぎとめられて遺されたこの歌聲は、末世が末世である限り響き止むことはないだろう。危機を危機として自覺しない精神、あらゆる形をとつたシニズムの彌蔓する現代にとつて、ヘルダーリンの文學、殊に一八〇〇年の夏に始まる後期讃歌のもつ意味の最大の積極性は、このことを措いて他にはない。以下、直

接二三の讃歌について、もう少し具体的に考えてみたい。

後期の讃歌以前にも、ドイツ或いはドイツ人を直接の題材にした詩は既に幾つか存在する。例えば、一七九八年に成立した僅か二聯の頌歌（後に改作されて十二聯となった）「ドイツ人に寄せて」（An die Deutschen）、九九年に成立した頌歌「ドイツ人の歌」（Gesang der Deutschen）等がそれである。今試みにこれらの頌歌を、一八〇一年に成立した讃歌「ゲルマニエン」（Germanien）と比較してみると、ドイツのあるべき未来の姿に對するヘルダーリンの深い希望と確信が、後期の讃歌に於て如何に積極的な意味と、生き生きとした現實感をもつて表現されているかを知る上に決して無駄ではあるまい。

鞭をもち拍車をつけて木馬に跨つた子が、勇ましく

偉くなつた積りでいるからといつて、その子を嘲るには及ばない

何故ならドイツ人たちよ、君たちとても行動に貧しく

豊かなのは思想だけなのだから

この「ドイツ人に寄せて」に於ける、ドイツ人への非難が、十二聯の同題の改作では非常に興味深い變化を遂げている。即ち、第二聯の三行目に於つて、前稿の“Denn, ihr Deutschen, auch ihr seid”は改作では、“O ihr Guten! auch wir sind”と改められ、そのことによつて詩の發想が殆んど根本的に違つたものとなる。そして「行動の貧困」、「國民の内部の沈黙」に或る積極的な意味をさへ豫感するのである。

そして國民のうちなる沈黙、それは祝祭の前

ことはぎであるのか？

（第三聯、一一二行）

詩人はつゞいてこの詩の中で、「祖國の魂」、「創造的な守護神」の出現を期待するのである。「ドイツ人の歌」では更に積極的に、ドイツは、「おお、諸國民の聖なる心臓よ」と呼びかけられ、「地上をよろめきさ迷う不様な」にも似

た現狀に對して、しかし何時かは「時代のこよなく熟した果實」として、新しい名と共に現れ出るであらうと歌われる。ヘルダーリンはこの詩で、「愛から生れた新しい形象」を、ギリシャの再來を、愛の國をドイツの未來に期待する。

おまえのデロスは何處に？　こよない祝祭の日に

ほくらすべてが相逢すべき　おまえのオリムピアは何處にあるのか？

讃歌「ゲルマーニエン」に於ては、詩人の歌わんとする内容が、神話的なものの中へ完全に包含され、あるべきドイツの姿が、「神のこよなく靜かな娘、司祭」ゲルマーニアの姿をとつて、まさしく現前せられている。こゝではもはや、一人の詩人が祖國の未來に對して、希望と豫感の呼掛けをするのではない。遠くインドゥスからギリシャを越えイタリヤを過ぎ、アルペンを越えて飛翔し來つた、「神々が遣はした使者」である驚が、選ばれた者ゲルマーニアに、彼女の使命を豫言し告知するのである。ゲルマーニアの使命とは、「神々の腹恚」が重大なものとなり、「一つの眞實なるものが現われずにはおかぬ夜と晝の間」に、即ち歴史の決定的な轉換の瞬間に、「眼前にあるもの」を、「母なる大地」を「命名する」(nennen)ことである。この「命名」によつて、「古代の過ぎ去つた神的なもの」が大地の名に於て再び響き出で、光景は一變し、遙かな方より未來の光が、よろこばしく輝き來たる。そしてエーテルが、若々しい處女のような淨められた大地と共にやすらかに生き、満ちたりた神々はみちたりたものたちの許に、ギリシャの會つての祝祭の日を思ひ出でて歸來する、これこそ未來と過去の「時代の中點」であり、「ドイツ人の歌」に於て求められたドイツのデロスが、オリムピアが實現せられるべき祝祭の日なのである。この讃歌の最後の聯は次のように結ばれている。

そのときおまえは司祭となり

周圍の王たちや諸國民に

武裝することなく助言をあたえるであらう

ゲルマーニアよ おまえの祝祭の日に

現實に存在する何らかの形式や意見、或いは主張を力強く歌うためになら、詩はプロパガンダでもあり得るだろう。けれども詩が、現實に存在しないもの、より高次のあるべき現實を歌うことを目標とし、更にはそれを使命とする場合、それが所謂冗長で内容空疎な觀念詩に終らず、また單なる個人的な期待や憧憬、或いは豫感や希望の領域に止まらないためには、尋常一様の詩の方法では不可能なことは言うまでもない。そしてこの困難な課題を實現する方法として選ばれたのが、ヘルダーリン獨自の神話的賦形であつた。即ち哲學的斷片「宗教について」(Über die Religion)の中で考えられた如く、神話的なものとは、理念と歴史上の事實が、無限な精神的内容と有限な現實の歴史的事象が、同時に統一され融合し合うような場である。詩人の個人的感情を直接に表現するのではなく、「異質の比喩的素材」の中へ完全に移し入れ融合させることによって、「深密性」の最高の表現を可能にすること、これが幾つかの哲學的斷片を通じて理論的に考えられ、また實際に後期の各詩篇に於て着々と高められてきたヘルダーリン獨自の詩の發想法であつた。それはしかし讃歌に於いて、最も幅ひろく自由な、最高の表現を獲得したと言わねばならない。この間の事情は今一例として舉げた、「ドイツ人に寄せて」及びその改作、「ドイツ人の歌」、「ゲルマーニエン」と續く、題材の類似した一聯の詩の比較によつても幾分かは推察されたい。頌歌及び悲歌と比較すれば、ヘルダーリンの讃歌の特徴は解明(Deutung)であると言ふことができる。ユムメレルは指摘した。確かに讃歌に於てヘルダーリンは、彼をとり卷くすべての事象の中に、近づきつゝある神々の啓示と合圖を見た。讃歌「ライン」で歌はれているように、不死の生に自足する神々は、自分自身に關しては何一つ感じ得ないゆえに、半神や人間を必要とするのである。即ち神々以外の誰かゝ神々のこゝろを感じなければならぬ。しかもヘルダーリンの時代理識は、先に述べた如く、その末世觀から逆に神々の到來の近いことを確信せずには居れない。このことから、

神の雷雨のさなかにつつ立ち、その電光を自らの手で掴み、歌につゝんで國民に渡すという、讃歌「祝祭の日の如く」(Wie wenn am Feiertage)の詩句に於て最も端的に覗かれる、詩人の緊迫した使命感が生れるのである。すべての事象の裡にひそんだ神々の合圖は、誰にも認知され得るのではない。それを感じとり、その隠れた意味を解明することこそ詩人の使命であり、神々に對する負託でなければならぬ。あらゆる事象の内奥にひそむ本質を、神々からの隠れた合圖を正しく言い當て、開示し現前せしめること、これが「命名すること」の、言い換えれば、事物の神話的解釋のもつ積極的な意味に他ならない。そして、「讃えること」とは更に、事物の本質を、歌うことによつて、もはや隠されてい^{ない}状態にまでもたらしことなのである。ヘルダーラーの後期の詩の本質が、屢々「Das feiernde Nennen」という言葉で呼ばれる所以であらう。かくして讃歌に於ては、もはや詩人の全體験が神話的な形姿の中に完全に融合されて歌われるだけではなく、更に積極的に、あらゆる事象の獨自な神話的解釋が行われるのである。時代について、歴史について、風景について、より具體的に言えば、例えば河流について(「ライン」)、「ドーナウの源泉にて」等)、ドイツの國土についで(「ゲルマニエン」)、キリストとその使徒について(三篇の所謂キリスト讃歌)など、すべての讃歌についてそのことが言われ得るし、更に詩の内部の個々の言葉の殆んどが、その目的のために獨特の意味を附與されているのである。

一八〇一年、即ちリューネヴィル嬢の年に歌われたゲルマニアの姿が、前に述べた當時のドイツの現状とは、一見甚だしく異つたものであるということも、これらの點からもう一度考えてみなければならぬ。何故ならこのゲルマニアの姿は、當時のドイツの時代と歴史に對する、獨自の神話的解釋によつてのみ、成立し得たドイツの未來像であるのだから。最初に氣附くことは、この讃歌に於て歴史は、古代ギリシャの神々の世界から、直接弧を描いて現在、より積極的には未來につながっている。そしてその現在とはこゝでは、一層正確に言えば、今こそ未來の出現をはらむ瞬間として、夜と晝の、歴史の根底からの轉回點として把握された意味での一つの時代なのである、詩の第

三聯までが、それらのことを示している。即ち、古代の神々とその時代がこの地上から去り、晝が消滅するとき、先ず司祭は滅び、寺院も畫像も風習も、その後を追つて暗黒の國へ去り、再び現われることもない。我々をめぐつて残るのは、墓穴よりたちのぼる黄金の煙にも似た傳説ばかり。だが今こそひとはその中に、嘗つて存在し、再び新たに大地を訪れる古代の神々の影を感じないでは居れない。何故なら到來すべき者たちは我々に迫り、神人たちの聖なる群、即ち人間の姿をとつて現われるべき神々の群は、もはやこれ以上蒼穹に踞いとゞまつてはいないのだから。天は約束と豫感に満ち、危機の相をはらんで我々の上に覆いかぶさり、大地は期待に溢れて横たわる。空と大地ばかりでなく、緑に芽ぶく「供犠」(Opfergabe)としての小麦の野も、「豫言者的」(prophetisch)な山々をめぐり東方に向つて廣くひろがる河流の谷間も、こゝではすべてが獨自の神話的解釋による、新たな時の到來の合圖として、深い意味をもつて表現されている。エーテルからは神々の言葉が降りそゞぎ、鶯が神々の使者として飛來し、詩の最後までゲルマーニアの覺醒と使命とを告知するのである。このインドゥスからパルナスを越え、イタリヤの犠牲の岡を過ぎてゲルマーニエンに至る、鶯の飛翔の經路は、ヘルダーリンの後期の讃歌にとつて甚だ重要な、アジア・ギリシャ・ドイツの問題と共に、ヘルダーリンの歴史觀とも關聯して非常に象徴的であると言わねばならない。

さて神の最も靜かな娘ゲルマーニアは、自らの使命を意識して時の到るのを待つ。フランス革命の「嵐」が、重大な危機をはらんで頭上を過ぎてゆくときにさえ、無垢なる姿のまゝに黙している。何故なら彼女は「よりよいことを豫感していた」から、と歌われるのである。そして「すべてを愛する者」として、「困難な幸福」を荷い得るまでに強くなつた今、古代の神々の新たな到來をもたすために、母なる大地の命名こそが果されねばならぬ。そのためにこそ彼女には、歴史の遙かな昔、彼女がまだまどろみの中にあつた眞晝の別れの日に、友のしるしとして、「ロの花」(Die Blume des Mundes)即ち、讃えるべく「命名」すべき言葉が與えられたのである。このあるべきドイツの象徴としてのゲルマーニアの姿は、勿論詩人としてのヘルダーリン自身の姿に微妙な方法で重なつてい

る。

詩の内容のすべては、到底こゝでは汲みつくし得べくもないのだが、この歴史と時代の大膽で獨自な神話的解釋によつて歌い上げられたゲルマーニアの姿が、當時のドイツの現状と比較して考えられるとき、如何に積極的な意味をもつものであるか、少くとも幾分かは明らかにされたであらう。古代から弧を描いて直接未來につながる、それは單なる安易な飛躍なのではない。原初に存在した合一の状態から、分裂の苦惱を通じて、新たなより深い合一の状態に至る、更に言えば下降こそ上昇に通ずる唯一の道、これが夜の時代、末世の時代の極端に深刻な時代意識と時代苦を根底として築き上げられた、ヘルダーリンの眞の悲劇的な運命觀であつた。それらすべてを根底に置き、しかもひたすらに未來に向うこと、これが讃歌「ゲルマーニエン」に於けるヘルダーリンの歴史觀の積極性なのである。

次に、ヘルダーリンの時代意識を考える場合、どうしても「汝和解者よ」(Versöhnender, der du nimmer glaubt)「唯一者」(Der Einzige)「パトモス」(Patmos)の所謂キリスト讃歌に於て、新たに現われてきたキリストの姿を無視するわけにはゆかない。既に祖母の七十二回目の誕生日を祝う詩(一七九九年)の中で、「この世の苦惱を自ら荷ひ、よろこんで死に就き、他の人々に代つて痛みと辛苦から、勝利を得て父なる神のもとに歸つて行つた」キリストを、「すべてを和解するもの」、「この唯一のひと」として讃えている。更に積極的には、エトナ山上に於けるエムペードクレスの死が、犠牲死としてキリストをはつきり象徴しているのだが、キリスト讃歌を除いて、最も注目されねばならないのは、悲歌「パンと葡萄酒」(Brot und Wein)の終りの二聯に歌われたキリストの姿であらう。こゝではキリストは、「晝の時代の終末を告げて姿を消した」最後の「靜かな守護神」として、また、あるべき未來の時にはこの地上に降り來たる「炬火を振りかざす者」、「最高なる神の子、シリヤびと」として歌われている。既にこの詩で、キリストは酒神と並んで讃えられているのだが、キリスト讃歌に於てはより積極的に、古代ギリシャの神神との關係づけがなされている。即ち、讃歌「唯一者」に於ては、バッカス、ヘラクレスの兄弟と呼ばれ、「神々の

種族の最後の者」と名附けられる。かくしてヘルダーリン独自の神話的解釋によつて、言わば古代の神々と和解させられたキリストのもつ最大の意味は、先づ犠牲死であると言わねばならない。彼の犠牲死は、神々の最後の一人として、其の時代の終末を宣することによつて、夜の時代への轉換を果す役割をもつ。これは頌歌「ヒロン」(Chiron)に於けるヘラクレスの役目、即ちツォイスのしもべとして、「神の鏃」(Stachel des Gottes)をヒロンの足に射當てることによつて、最初の合一の状態からヒロンを、分裂の苦惱の中に陥れることにも似ていよう。それゆゑに、分離の神として、キリストは「ヘラクレスの兄弟」なのである。第二に、キリストの役目は、すべてを「和解する者」として夜の時代にもひとり作用し続け、新たな未來の合一の時代、「平和」の時代に招來されるべき神々の第一人者であるということである。これは悲歌「シュトゥットガルト」(Stuttgart)に於ける、もはやトラキヤの狂亂の神ではなく、すべての分離したものを再び結合する「共同の神」(der gemeinsame Gott)としての、酒神ディオニュースの役割にひとしく、その意味でキリストは「バッカスの兄弟」なのである。こゝに「和解者」としてのキリストの積極的な意味がある。ヘルダーリンは、このようなキリストの獨自な神話的解釋によつて、來るべき時代に對する自己の確信に、一層搖ぎのない確證を與えたのだと言えるかも知れない。最近、バイスナーによつて發見された十二聯より成る讃歌「平和の祝祭」(Friedensfeier)は、直接リューネヴィルの媾和の後に書かれたものとして非常に興味深いものであるが、その詳細に立入ることは今暫く時を待ちたい。

一八〇三年、ヘルダーリンの友人、イザック・フォン・ズインクレアーは、既に狂氣の最初の兆候を前年に経験していた詩人を伴つて、レーゲンスブルクの諸侯會議を訪れた。そしてこの會議は、フランスとロシヤの壓力によつて、百十二のドイツ諸國家を潰すことを決議した。その結果、僧侶國家と帝國直屬の國家の中、残つたのは合計九つに過ぎなかつたのである。既に時折彼を襲う意識の錯亂の中で、祖國のものはや確定的な没落を直接體驗したヘルダーリンは、その時一體何を感じただろうか？ 同年の十二月、出版者ヴァイルマンズに宛てた手紙で、詩人はこう書

いた。「戀愛詩などは、どんな場合にも、疲れた飛翔でしかありません。祖國の歌の氣高く純粹な躍動は、それとは全く別のものなのです。」ヘルダーリンはなほも歌いつづける。新たに來るべき時代の祖國を讃えるために。

「存在と非存在の間の状態に於ては、到るところで、可能的なるものはレアルになり、現實的なものは、イデアールになる。そしてこれこそ、自由な藝術描寫に於ける、恐ろしい、しかし神々しい夢なのだ。」ホムブルク時代の哲學的斷片「消滅の中なる生成」の中で、ヘルダーリンはそう書いた。そしてほゞその頃から始められた、事物の獨自な神話的解釋こそは、この夢を實現するために、彼にとつて避けることのできない詩作上の手段であつた。その結果形象だけでなく、個々の言葉にも獨特の意味が附與せられて、詩は確かに難解さを増した。しかしそのことで直ちに、ヘルダーリンの作品が神祕主義の袋小路に入つたなどと評するのは、全くの誤解であらう。ヘルダーリン自身が、「平和の祝祭」の草稿の裏頁に次のように書きつけている。「この詩をどうか善意をもつて讀んでほしい。そうすればきつと理解できなくはないだらうし、まして不快に感じることもないだらう。しかし、それでもなお私の言葉が餘りに型破りだと思ふ人があつたら、私はその人たちに、自分にはこうするより他に仕方がないのだと、告白せざるを得ない。美しい時代には、殆んどすべての歌い方が許されるだらう。そして自然から生れた歌を、自然は再び抱きもどすだらう。」

詩人が、しかもヘルダーリンのように傷つきやすい心情と、高貴な精神をもつた詩人が、このようなことを書かねばならなかつたことが、一體どのようなことを意味するか、今更くどくど述べたてゝる必要はあるまい。僕らはこのきびしい、何物にも屈せぬ不撓の詩精神と、そこからのみ生れ得た詩作品を前にして、——われら四方より患難を受くれども窮せず、爲ん方つくれども希望を失はず——という使徒パウロの言葉を、たゞ心に繰返すばかりである。